

第2回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和7年7月10日（木）10時～15時 参加者：35名（うち市町村等から24名）
会場：秋田県生涯学習センター講堂

「保護者と子どもをサポートするために支援チームができることを考えよう」というテーマのもと、今年度2回目の研修を行いました。はじめに、学校現場や社会教育の現場で活躍されてきた講師から、挨拶の重要性や家庭でのコミュニケーションの在り方について学びました。午後からは2名の講師による実践発表を聞き、具体的な取り組みや行動の起こし方について学び、参加者たちはそれぞれの立場で考え、最後に意見交流を通してその考えを深めていました。参加者にとって、学びや気づきの多い研修となったようです。

【午前の部 講話・演習】

秋田県教育庁南教育事務所社会教育アドバイザーの **沢村 正志** 氏に、「『親の安心・子どもの安心』につながる『複数の目の一人として』」というテーマで講話をしていただきました。ご自身の趣味が「ひたすら動くこと」という同氏の講話は、『いいこってどんなこ？』という絵本の読み聞かせに始まり、親が子どもに対して抱く感情の多様性について触れました。家庭教育における挨拶の重要性や、コミュニケーションの在り方についてお話しいただく中で、一日のスケジュールを夜から考えることを例示し、「おやすみなさい」という言葉をきっかけに、家族で夜の過ごし方（ゲームやネット）のルールを決めることの大切さに言及されました。家庭教育支援チームについては、その役割として「孤立を防ぎつつも、一人は認める」というバランスの取れた支援が必要であると強調し、今後も家庭教育支援チームが地域と連携し、子どもたちが安心して過ごせる環境づくりに貢献することへの期待を述べ、研修を締めくくりました。



【午前の部 参加者アンケートより】（抜粋）

- ・学校での経験から得た学びや気づきを講話していただき、やはり挨拶が大切だということを感じました。また、子どもの成長を見守るという点で、学校、地域、行政がつながることも重要だと再確認できました。
- ・読み聞かせ、演習、自己開示等、様々なしかけがあり、あっという間に時間が過ぎました。教諭、社教、管理職の経験を生かし、多様な視点からの子（孫）育て論は参加者にとって大変有意義であったと思います。

【午後の部 実践発表・意見交流】



実践発表①では八峰町何にもしない合宿実行委員の **神垣 恭彦** 氏に、「地域における子どもたちの交流の場の創出～何にもしない合宿～」と題してお話いただきました。地域における子どもたちの交流促進のために2024年に始めた何にもしない合宿は、これまで4回実施され、継続することで子ども同士だけでなく保護者同士の交流も生まれたといえます。

地域のつながりの希薄化に危機感を持った同氏の実践に、参加者たちは自分事として話に聞き入っていました。

実践発表②ではNPO団体はにかむ代表の **佐藤 存** 氏に、「地域に顔の見える家庭教育支援をめざして」と題してお話いただきました。これまでのご経験から育まれた協調性やコミュニケーション能力を生かして、数々の事業を手がける佐藤氏。NPO法人はにかむは2020年2月に設立され、コロナで卒業式に出られない子どもたちのためにZoom配信を行ったり、中3プロジェクトとして受験生にお守りを渡したりする活動を開始し、現在も継続しているとのこと。2024年には県内8番目の家庭教育支援チームとして文部科学省に認可され、助成金や補助金に頼らず実践されている佐藤氏のお話に、参加者たちも引き込まれている様子でした。

最後に、グループに分かれ「自分の立場でどんなサポートができるか」というテーマで意見交流を行いました。参加者は実践発表を参考に、思い通りのサポートの在り方を考え、活発な意見交換をして一日の研修を終えました。

【午後の部 参加者アンケートより】（抜粋）

- ・お二人の「まずやってみる」という姿勢に感心しました。何か新たなことを始める際には、まずは組織づくり、会議と考えがちですが、事業を通したつながりづくりの有効性を感じました。
- ・家庭教育支援チーム員として活動していますが、今後の参考になるとても素晴らしい内容でした。